

家

の周りの植栽や鉢物がすっかりなくなつてからも何日かおきに実家に通つている。水遣りも必要なくなつたので格別用事はないのだが、人が住まなくなると空気が滞留してあつという間に傷むと聞くので、換気を目的に行く。町内でうちの筋だけでも数軒同じような家があるし、同世代と話すときの主要な話題の一つなので、実家の空き家問題に悩む人は、かなり多いのだろうと思う。

ご近所の空き家はいずれも遠方から通つてこられるので、それに費やさねばならぬあれこれのエネルギーは、ぼくの比ではあるまい。県外から実家の様子を見に帰つてきていた娘さんとたまたま出くわし、家の前で立ち話をした。彼女はところどころスルメみたいに反つくり返つた障子を見ながら、「どうしようもなくて…」とため息をついた。

窓を開けて空気が流れ始めたのを感じると、次は柱時計をチェックする。家と同じ年のはずだから、この振り子時計も還暦が近い。ぜんまい式の愛知時計で、巻いて三十日が近づく中央に赤い○が現れる仕掛けになつてはいるのだが、このごろはすっかり鷹揚になつて知らせてくれなくなつた。

振り子が止まつているのを目にすると、なぜかゼネジを回さずにはいられない。人のいなくなつた家で時

計まで止まると、まるで心拍計が止まつてしまふみたいだから。

ぎこぎここと巻き終わると、人差し指を長針に当て、くるくる回して時間を合わせる。十二を越えると、一日指を止め、短針の差す時間に合わせてボンボンと鳴るのを聞く。打ち終わるのを待つてからまた指を回す。そうしないと壊れると思ひ込んである。よく聞く時間より一つ二つ打つ数が少ない。しれつと手を抜いてくるところが年の功である。

でも、父のこの家での最後の夜は、正確に時を打つてくれた。真つ暗な寝間の中で、父の苦しそうな息づかいと振り子の音を重ねて聞いているうち、鉦は一つずつ数を増やしていった。ぼくはそれを数えながら、すべきことを整理できたのだつた。

先日、県内のある老舗温泉旅館に泊まつたら、改修した渡り廊下の壁面にうちのと同種の柱時計がずらつと並べてかけてあつた。ただどれも十二時を指したまま止まつている。レトロな調度をあちこち配した主人の趣味に違いないと思つて聞くと、

「いや、違ふんですよ。客室で使つていたんですがね、お客さんがやかましくて寝られんつて言われるので、外したんです。」

ということだつた。



専門ババ奮闘記(その2) 87

木幡智恵美

ショートステイ (6)

「婆さん、今日も行くなり連れて帰れで大騒ぎだつた」と、面会から帰つた夫がため息交じりに言う。次の日私が行くと義母は入浴中で、部屋に戻つてくるまでケアマネさんと話した。「毎日ではないですけど、何でこんなところに居らせるかつて大声で騒ぐことがありません」と言われるので、「家でも、人が変わったように高飛車な物言いをするのがあつたんです」と答える。「コロナの流行で、もうすぐ面会ができなくなります。予定と言つては何ですが、面会は少し間を空けてみてはどうでしょう」と提案された。

それからは、週二回の入浴日に汚れ物がでるので、その日だけ面会に行くことにした。夜に電話がかかってくることもあれば、「拍子抜けしたわ。あら、来たかねだつて」と夫が帰ってくることもあつた。私が行つた時は、「帰りたい」を連発し、病気のことをいくら話しても、聞く耳を持たない。いろいろ聞いているうちに、あれつと思うことがあつた。帰りたいという家は寺町なのだ。頭の中では、幼い頃の日々を生きているのだろうか。

コロナの三波が広がり、年末から面会禁止が決定。夫と、週一回は日中だけでも家に連れて帰ろうと話し、まずは元日に連れて帰ることをケアマネさんに伝えた。

そうして迎えた元日、前日から雪が二十センチ以上積もり、どうしようかと迷つたが、予定通り雪の中をショートステイまで迎えに行った。玄関に板を置いてスロープにし、車椅子ごと上がつて台所へ。夫が義姉に家に連れ帰つた旨を伝え、義母が電話を替わる。「帰つたよ。寺町」やはり、義母の頭の中の家は生家である寺町になつている。

しばらくして娘たち親子がやってきた。目を細めてひ孫たちを眺めながら、義母は黒豆や赤貝を少しづつ口に運んでいる。途中便意を訴え、トイレに連れて行く。暖房もないところの後始末や紙オムツ交換で、さぞ寒かろうと思うが、何も言わずにされるがままになつていた。一時間ほど経つたらうか、うとうとし始め、「横になる」と言われる。部屋からリクライニングの椅子を持って来て布団を幾重にもかけたが、「寒い」の連発。予定より早くショートステイに戻つた。移動だけで、相当に疲れたようだ。ショートステイのように全館暖房ではない。トイレも廊下も寒い。冬の間は、家に連れて帰るのには無理があるようだ。

30代フリーター やあ、ジイさん。

「私の祖国日本は、第二次大戦の後自ら招いた戦争への反省のもと、戦争放棄をうたった憲法を採択し、世界の中で唯一、今日までいかなる大きな惨禍にまきこまれることなく過ごしてきました」。石原慎太郎が死んだ日、彼がかつてこんな言葉を残していたことをツイッターで知った。2016年五輪を東京に招致するため、IOC会長に宛てたメッセージだ。現憲法の破棄を主張していた石原が仇のような現憲法を日本のアピールに使っていたことに、それを引用したツイートの主も「石原慎太郎最大の謎」と書いている。

年金生活者 石原が憲法、とりわけ9条の持つ、あなどりがたい「威力」を洞察していたことの証左とも言える。

「威力」の源泉は戦後の日本国民が非戦・非武装の理念を自らのアイデンティティーとしたことにある。だからこそ、その破棄は日本国民のメンタリティーを一変させると石原は考えてい

らせ、統制経済を固守する体制の崩壊を招いた。

世界の資本主義の発展に大きく寄与した日本の戦後の高度経済成長は、軍事上の負担を大幅に免れ、持てるリソースを経済に注ぎ込んだ結果であり、それを可能にしたのが9条の非戦条項と、それとセットでアメリカが日本に押しつけた日米同盟だった。

それらがなかったら、世界の資本主義の発展は今よりは遅れ、したがってソ連の崩壊ももつとあとになっただろう。外資の導入によって進んだ中国の資本主義化も今ほどは進まず、夏冬2回の五輪を開催するほどの大国の姿を私たちは見ることがなかっただろう。

30代 風が吹けば桶屋がもうかる式の話に聞こえる。

年金 憲法9条はイエスがかけられた十字架に似ている。イエスはその上で死ぬことによって人類の罪があがった。9条もまた戦争という人類の罪があがなう役目を与えられた。キリスト

たと推察される。

五輪招致のために背水の陣を敷いていたと思われる石原は不本意ながらその威力に頼らざるを得なかった。憲法9条は現在の日本国が世界に向かって自らを表現し得るほとんど唯一と言っている国家理念だからだ。ナショナリストの石原は招致にあたって日本の数々の伝統をアピールしたかったに違いない。しかし、皇室にしる、武士道にしる、茶の湯にしる、ローカルな魅力は備えていても、世界中の人びとが共有し得るような普遍性は備えていない。

30代 9条のような条項のある憲法を持つ国は日本以外にない。その意味では9条だつてローカルだ。

年金 9条がなかったら世界はどうなっていたかを考えれば、そうでないことがわかる。東西冷戦はもつと長引いていただろうし、中国も今ほどの経済大国にはなっていなかっただろう。

保守本流が主導した自民党政権は、軍事力強化を促すアメリカの要求を9条の礎刑に相当するのが9条の永遠の「武装解除」という刑にほかならない。

この条項は戦争を引き起こした日本国に戦勝国が科した刑であり、戦後の日本国民はそれに進んで服することによって、自らのアイデンティティーを維持してきた。同時に9条には日本国民だけでなく、戦争を止められなかった全人類の罪を償う刑としての意味が隠されている。それは隠された「神

条を盾に退け、軽武装と経済優先の路線をとり続けた。それが目覚ましい高度経済成長をあと押しし、東西冷戦で西側を優位に導くのに貢献をした。

東西冷戦は敵国の国民の生存と生活を破壊する軍事力を競い合うだけでなく、自国の国民の生存と生活を豊かにする経済力を競い合う戦争だった。人びとを幸せにするのは「資本主義」か「社会主義」かというイデオロギーの戦いを最終的に決したのは、軍事力ではなく経済力だった。

西側陣営で発達を続けた資本主義は、第2次産業を牽引車とする産業資本主義から、第3次産業を牽引車とするポスト産業資本主義に転換した。「社会主義」と名づけられた統制経済は、軍隊のような規律に支配された工場での生産を中心とした産業資本主義にはわりと適していたが、自由な発想によってしか生まれないイノベーションを絶えず迫られるポスト産業資本主義には向いていなかった。これがソ連を中心とした東側諸国の経済発展を遅

話」であり、それが日本だけでなく世界各国に戦争をためらわせる「威力」を9条に与えている。

30代 アメリカが日本に9条を押しつけたのは、日本を軍事的に無力な国にし、二度と自分たちに逆らうことができないようにするためだったんじゃないのか。

年金 「武装解除」を占領期間中の一時的なものではなく永久のものにするには普遍的な大義名分がある。それが「恒久の平和」（日本国憲法前文）すなわち非戦・非武装の理念にほかならない。

だが、それは日本に対する一方的な断罪と非難される余地を残している。アメリカは日本への無差別爆撃や原爆投下といった自らの行為に対するひそかな罪責感を払拭することができなかったはずだ。そのため、その罪があがなう役割を、9条という名の「武装解除」の刑に無意識のうちに、あるいはひそかに与えたと理解することができる。

ニュース日記 819
中村 礼治

憲法9条は世界を どう変えたか